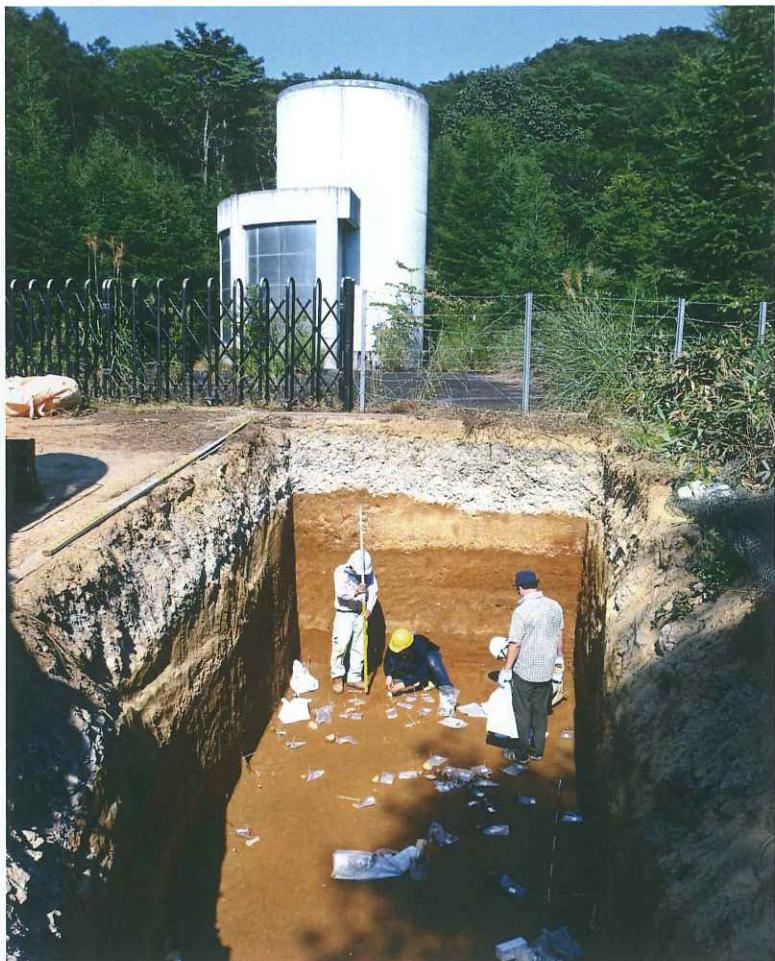


国内初の石器セットで最古の年代を示す

佐久市香坂山遺跡出土の旧石器について

日本列島の後期旧石器文化を特徴づける石刃技法はいつどのように始まったのでしょうか。この問いは、
旧石器考古学の最大の目標である現生人類の列島到来の実態解明とも直結します。この大問題を解くカ
ギが列島の真ん中に所在する長野県佐久市八風山の山中に眠っていることが分かつてきました。



黒色ガラス質安山岩という優れた石器石材の産地でもあるこの山中で八風山Ⅱ遺跡が佐久市教育委員会により発掘調査され、列島最古の年代をもつ石刃生産地点が検出されたのが1994年11月でした。この成果を踏まえて1996年10月に長野県教育委員会により発見されたのが、同じく八風山の標高1,140mの尾根に立地する香坂山遺跡でした。上信越自動車道八風山第2トンネルの立坑地上施設の建設に伴い、1997年7月に長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査され、地表下5.5mという驚異的な深さから、約3万年前の始良Tn火山灰層の下位で中型剥片が主体の石器包含層が検出されました。そこから40m離れた斜面下方でもトレンチが2本設定され、地表下2.8mの同じ地層から長さ10cmを超す大型石刃2点を含む石器包含層が確認されました。



大木文彦氏 撮影

まさにその石刃を含む石器包含層が23年後の2020年になって、ユーラシアの最古の石刃石器群と類似しているのではと注目されて、発掘調査されることになったのです。すなわち、ユーラシア各地では現生人類の時代である後期旧石器時代の文化が、大型石刃石器群から始まります。それを踏まえて列島全体を見渡すと、23年前に香坂山遺跡の確認トレントから出土した2点の大型石刃が、列島の石刃生産技術の由来を語る未知の情報の片鱗を見せているのではないか?と予想されたのです。そのためその直感をたよりに、2020年8~9月に学術目的の発掘調査を実施したわけです。

その結果10cmを超える大型石刃、尖頭形剥片、小石刃をセットとする石器群を検出しました。これに刃部磨製石斧が伴うことも判明しました。尖頭形剥片は求心剥離石核から規格的に生産され、小石刃は大型石刃を石核素材とした彫器状石核から剥離されていました。この石器の組み合わせは日本列島では初めての発見となりました。この3セットはユーラシアの初期後期旧石器時代(IUP期)と組成・技術ともに瓜二つであり、ユーラシア最古段階と酷似した石刃石器群が列島に存在したことを示す成果を得たわけです。焚火の燃えかすに由来すると思われる木炭片から遺跡の年代を測定しましたところ、石刃石器群の年代としては日本列島で最古の年代値となる36,800年前と分かりました。石器の内容から、ユーラシアを横断して到来した現生人類の初期の文化と考えられ、それが36,800年前には佐久の八風山の尾根に到達していたことが分かったわけです。列島の後期旧石器時代の開始と現生人類到来の実態を解明する大きな手掛かりとなることは間違いないと考えられます。(国武 貞克)